女學雜誌

第二百六十八號
明治二十四年六月六日發兌

禁酒のホーム　安藤太郎

繪畫評

繪畫展覽會の繪畫を評す、其文門外漢の作にあらず實に當路者の筆に成る、專門の人一讀の價多し。

自殺論

島山勇子を論ずるに續ひて、自殺を批評難辨するヿ極めて細密、時弊に應じ多少の益あるヿを得ん。

借財する勿れ　蓮峯外史

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 268 JUNE, 6TH. 1891.

EDITORIAL :—Patriotism and Suicide.

CHILDREN'S COLUMN :—"Little Lord Fauntleroy." (A Translation.)

SCIENTIFIC :—Natural Philosophy in Questions and Answers.

MISCELLANEOUS :—The Melancholy man. The speculatos. Take care of your Debts. At the Art Exhibition.

THE HOUSEHOLD:—Temperance in the Homes. (Mr. Tarō Andō.)

LITERARY :—A Letter Kiku wrote to her Husband.

NOVEL :—"Courtship of Miles Standish." "Shikai no Arashi." (A Story of Persecution in Japan in the 16 Cen.)

CRITICAL NOTES.

NOTES AND NEWS.

QUESTIONS AND ANSWERS.

CONCERNING WOMEN.

第二百六十八號目次

社說　畠山勇子(下)自殺論(巖本善治)

兒籃　小公子(若松しづ子)。

理學　姉妹の對話(吉田伸子)。

隨感　メランコリッシ(しのぶ)●山師(みどり)。

雜錄　負債を疎略にする勿れ(蓮峰外史)●油畫彫刻展覽會漫評

家政　禁酒のホーム(安藤太郎)。

文學　菊女の夫釆女に贈りし艶書(南城漫史)。

小說　マイルス、スタンヂッシュの戀(愛山逸氏)●紫海の嵐(みさを)。

批評　吾事諸問錄●東光●室の梅●花の園生。

時事　クレードル●内閣搖々乎(再び)●勸告、辭職●超然さ冷然●自由黨宣言書●民情●幕府衰亡論●女子教育●海外の日本婦人●保育園●合種孃●離婚法

問答　二件。

女報　さまざま。

週報

MUSICAL ENTERTAINMENT

FOR THE BENEFIT OF

"MEIJI JOGAKKO."

Our sisters in Japan have long stood in need of a Christian education which means not simply the giving of proficiency in accomplishments native and foreign, but to imbue them with a Christ-like spirit, to prepare them for a noble life of intelligence, love and self-sacrifice. With this view in mind, a small private school was started in 1885, to be carried on by the native Christians, independent of any mission help. This was the beginning of "Meiji Jogakko," and for six years it has bravely struggled on, relying for support only on the income from the pupils and on the assistance of its advocates and friends. However, a work like education in which the disbursements far exceed the income, the support is by no means easy except it is endowed with a permanent school-fund. Wishing to do something towards raising this fund, we together with the friends of the school who have kindly promised their aid, have arranged for this entertainment, trusting that the public will favor our cause, so that, with their sympathy aud assistance, the noble work which has been begun may be carried on with much greater facility and power.

Your's faithfully

MASA SHIMADA.
TSURU TAGUCHI.
HANA KIMURA.

The following are friends who have favored our plan.

MRS. D. HATANO.
MISS HARRISON.
MRS. T. WATANABE.
MISS N. OKABE.
MRS. T. WATASE.
MRS. H. KATO.
MRS. S. KANAYA.
MRS. U. KAJI.
MRS. T. KANAMORI.
MRS. H. KAWAMURA.
MRS. N. YOSHIDA.
MRS. T. YOKOI.
MISS T. TANABE.
MRS. S. TAKEBE.
MRS. R. TAMURA.
MRS. S. TSUDA.
MRS. H. MURAOKA.
MRS. T. USHIODA.
MRS. M. UEMURA.
MRS. K. YAJIMA.
MRS. N. MARUYAMA.
MRS. K. KOJIMA.
MRS. A. ANDO.
MRS. S. ASAI.
MRS. T. SASAKI.
MRS. S. KIMURA.
MRS. K. SHIKATA.
MRS. S. MORISHIMA.
MRS. T. SUDA.

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第二百六十八號　明治二十四年六月六日發兌

社説

自殺論

岳山勇子（下）

某と云ふ老學者が先頃の演説に云へらく、日本に三の美風あり、帶刀その一つ、復讎その二つ、自殺その三つと。

露皇太子に傷つけたる津田三藏は、皇太子に恙がなけれども、沿路を警衛したる巡査なりけり。巡査の中より斯る不屆者を出せるは、以ての外の不取締りと云ふべき也。沖滋賀縣知事、齋藤同警部長之れが爲めに職を免ぜらる、蓋し當然の御處置と云ふべし。然るに、何某とやらん云ふ俠客は、此の變ありと聞くや、家代々の正宗の短刀を持出し、警部長と知事とに輸して暗に諷する所ろありき。而して新聞記者の中には、切りに之を壯んなりとしたる筆法も見えたりける。

凡そ斯る論者は、一の津田三藏を生ぜしとを慨するに似て、反つて亦た第二の三藏を異日に激成せんと欲するものなり。吾人深く之を惡む。大凡そ自殺を尊重するは蠻野の遺風にして、文明人の耻辱之に過るもの稀なり。

知事、警部長等が不取締の罪は言ふ迄もなし、當に愼しみて大政府の處罰を待つべきものなり。然るに、謹愼として此御處置を待ち、天下公法の爲めに賞罰を明かにせんとを希圖するの勇もなく、亦た國家に一大事を引起し切めて善後の爲めに些さかにても盡力贖罪するの覺悟もなく、自己の失策に心落ちし、四方の抗撃に得堪へずして、割然屠腹するとなどあらんには、其怯と愚とは憫れむにも足らざる者あり。世人彼の自ら刄を裁し、腹を十文字に切り、大腸をさぐり向を睨みて擲げ出せりなど云へるを、以ての外の勇氣なりと思ふ。

左れど斯る勇氣は野蠻人の誇る所ろにして、憲法あり、政府ある所ろの文明國人が大ひに耻る所ろのものなり。人もし公けの罪を犯さば、當に公けの處罰を受くべし。他人我に害を加られば、讎を反すは法律にあり、我の自から手を下すとを要せず。我もし德義上の罪を犯さば、當に悔改して其の天罰の來るを待つべし。之を國家を重んじ道義を尊とむ所ろの文明國人が覺悟とは云ふ。然るに敢て此の當然の處罰を待つの

勇なく、勝手に自裁して早く苦しみを逃れんと欲す、怯にあらずして何ぞ。マダム、デ、スタルは女丈夫なり、其の秀麗なる筆を以て自殺を酷論し、云はく、自から殺すものは、大率ね自からの益を計るものなり、其の衷心を詮じ來れば、心底必らず利己の慾存せずばあらずと。知事、警部長にして、若し誤つて自殺せば、其罪や彼等が不取締の罪よりも大ひなり。幸ひにして兩氏世上惡論の爲に激せられず、能く善后の爲にも力を盡されたるは慶すべきの事とす。

夫れ、自殺は多少の勇氣あるものゝ爲す所ろなり。若し刃を握り、自から屠るだけの決心すら無からんには、恐ろしくもあり、痛氣にもありとて、中々割腹すべき勇氣は出でじ。故に自殺は幾分の勇氣によりて成る、然れども未だ大勇によりて成るものにはあらず。死は易く、生は難し。一朝裁然として死するは寧しろ易々たり、自から罪を贖ふの功を奏し、天下の攻擊に泰然として向ひ、虫の蝕するが如く藥の腐するが如き懺悔自愧の念いよ〳〵改化發心せんとするは、蓋し非常の大勇を要す。左れば、自殺には或る勇ありと雖ども、之に忍び生きて艱苦に面てを向ふるは德義上の勇氣數層の上にあらん。世人たゞ蠻民の勇を賞して、君子の勇を贊せず、加ふるに、老儒出でゝ暴りに自殺を賞揚す、彼輩は日本を數世紀の昔に退化せしめて、神洲斯の如しと誇らんと欲する歟。

自殺の悪しきは、其天命を輕んじ、德義を蔑みにし、國法を無みするが故にあり。カント云く、人は自己を害するの權なし、自から愛して其身躰を防禦するは、德義上の一大義務なりと。われ暴りに斷し、隨意に此の罪なき身躰を殺さんとす、何等の殺人罪ぞ。且つ天の我れを世に存せしむる偶然にあらず、番卒が主將の命を蒙むりて門外に立つとの如く、我等個々世に盡すの義務を有す、然るに未だ天の招還を聞かずして、勝手に我持場を去らんとす天命を輕んずる、最と大ひなりと云ふべし。ポウロ云く、世は小學の如しと、蓋し人の世に生存らふるは、樣々の經驗を積んとてあり、自から失策して苦罰を蒙むるは、道義上一段の進步を爲すの時とす、悲むものは幸わひなり其人は慰さめを得べければ也、難やむものは幸わひなり其人は安きを得べければなり、人先づ大ひに難やみ大に悲しむにあらずは、未だ以て天道人情の至奧を悟るに足らず、左れば、人の艱苦に際するは正に其の進步の階に到

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

着するの時とす、此に於て一奮英發躍然として勇を鼓し猛進するを要す、則はち德義上の大勝利を了せん、然るにカナンの地微かに見ゆる頃ほひ、俄然挫折し、罰の敵に心くぢけ力盡き氣屈し、自殺す、是れ豈に道德上の天則を蔑ろにして、自から一時の安きを貪ぼるものにあらずや。特に、世に惡を醸したるものは、世の刑を受るの義務あり、之を國家を重んじ、憲法を尊とむの覺悟となす、然るに政府が當然の賞罰を待たず、自裁して無政府の時の如くす、之を蠻野法律なきの時世に於てせば或は可なり、之を今の日本の如き地に於てせば、國家に對するの罪極大なりと云はん、如此く國家を重んぜざるものあり、故に亦た暗殺刺擊の弊風を生じ、輿論及び公法の手を假らずして之を一個自己の手に制裁し、以て罪人を罰すと稱す、自殺の國は暗殺の國なり、國家の尊嚴を害すると此上なし。

自殺は臆病より發す、自殺は天を重んぜざるより生ず、自殺は文明を愛せざるより來る。吾人は此の故國を文明國となさんとを熱望す、吾人はわが同胞をして君子たらしめんと欲す、吾人はわが日本人をして天を重んずるの民たらしめんとを祈禱す。之を以て自殺を惡むと平素比類なし。

トルストイ自殺せんとして未だ果さず、歎じて云く、あゝ我れ自殺するの勇だになしと。吾人は年少活氣の士に、少くとも自殺するの勇はあれと云ふ。然れども此勇を以て最上とせず、更に一層の大勇あらんとを要むるや切なり。まさにジャン、ジャック、ルソウに倣ひて言はん、

聞けよ、世上の少年、われ汝を愛す、われ汝が道に誤まるとを甚たく歎く。汝心の底に道念を存せば、來りて聞け、われ何如に人世の愛すべきかを告げん。汝ち厭き果てゝ死の誘惑に出で會はゝ、當に自から斯く言ふべし「あゝわれ死するに先ちて更に一善を爲さん」と。則はち出でゝ、或救ふべき貧人を見出し、慰さむべき或不幸の人を見出し、保護を與ふべき或壓制を惡むるの人を見出し來れ。かくして、今日も自殺を延し、明日も自殺を延し、彼の一善を爲し遂ぐる迄で自殺を延すべし。此に至りても尙ほ生くるの甲斐なしと思はゞ、最早汝は世に用なきの人なり、汝はかはや何如にともすべし。

然れども人もし熱の如く世の人を愛せば、何如でか世に厭き

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

て自づから死することを得ん。世を速やかに去らんと欲するは、世を愛せざるなり。世を愛せざるは、世の人を愛せざるなり。

吾人は自殺に反對す。自殺を惡む。自殺の人を怯愚とす。左らば、畠山勇子を何如にと思ふ。

此に至り吾人は端然として更に一事を言はん。夫れ、自殺に三つの種類あり。國法に隨ひて自殺するもの一なり。自らの爲に自殺するもの二なり。他の爲に自殺するもの三なり。行ひに於ては三者とも同じ、左れど德義上に於ては至大の懸隔ありと。

國法に隨がひて自殺するは、一種の刑を受るに均し、古の武士は此の刑を以て武門の面目となしぬ。蓋し勇氣ある人の擧れとする所ろなり。吾人も亦之を好みす。

自からの爲にするものは、自から罪を犯し、其當然の結果を懼れて早く世を去らんとするものあり。若くは、人に迫られ操を守るに由なく、止を得ず遂に自殺するものあり。後者は、未だ美を盡したるものにあらずと云へど、然も大ひに恕すべきものあり。但だ夫の前者に至りては、卑屈怯愚此の上なし。

操の爲にするものは、先づ身を正ふし、言を嚴そかにし、心を淸高至愛にして、他の獸慾者に說き聞かすべし。斯て聞かずば、携ふる所ろの刄を以て突き殺し、世に惡者を亡ぼすべし、而して尙ほ及ばずば自殺すべし。此流の自殺は大ひに恕すべきものあり。

他の爲にするものに至りては、處置に於て往々未だ足らざるものありとは言へど、其精神道義に至りては、善美申分なし。孔子云く、身を殺して仁を爲すと。基督云く、人その友の爲に生命を捐つ、之より善なるはなしと。他の爲に自殺するは、即はち犧牲獻身なり。

畠山勇子が自殺は、其罪の爲にあらず、又迫られたるが爲にあらず、實に國を思ひ、陛下を思ひ、同胞姉妹を思ふが爲めのみ。何人か敢て之を非とせん。たゞ其智識裁斷に至りては未だ及ばざるものありき、之れ其學ばざるが故にして深く咎むべきにあらず。其日記を見るに、嘗て明治女學校の下婢たらんとし、一日を後れて及ばず、之を終世の遺憾となせり。吾人が殘り惜しさ亦何んぞ彼烈婦に劣らん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

兒籃

小公子

第五回（下）

若松しづ子

彼是する中に食事を持ちこみまして、一同食卓に着きましたが、彼の大猫もセドリックの側の椅子の上へチャント座を占まして、食事の最中大威張りにゴロ〳〵咽喉を鳴らして居り升た。さてこれから間もなくハ氏がお屋敷へ伺ました時、直お目通を仰付られました。老侯は此時暖室爐の側の贅澤を極めた安樂倚子によつて、彼の酒風症に悩んだ御足を足臺の上に休めて居られましたが、フサ〳〵した眉の下の鋭どい眼はハ氏をきと睨まへて居りました。そして外貌は沈着に見へても、心の中は密かにイラ〳〵してざわだつて居るといふとはハ氏もよく承知して居りました。

イヤ、ハヴィシャム、歸つたかな？どうで有つた？

御意に御座ります、フォントルロイ殿は母君と共にコートロッヂに入らせられます、御兩人とも海上甚だ御無難で、御機嫌うるわしう御座り升。

老侯はこれを聞いて、なにか待ちどふで、氣が急くといふ調子で、手をもぢ〳〵しながら、先づ鼻でフン―、といひ、

それは結構といふものだ、それはそれでよしと、ハヴィシヤム〳〵つろぐが好い、一杯やつて、落着たら、其跡を聞う。

フォントルロイ殿は母君と彼の處に御一泊あつて、明朝は御同道いたしてお屋敷へ伺ふ筈で御座ります。

老侯は倚子の横に臂を休めて居られましたが、其手を擧げて眼にかざし、

フ、ン、其跡はどふだ？此件に付ては巨細を申送るに及ばぬといつて置たから、まだ何事も知らずに居るのだ、全躰どんな奴だな、其小息子といふは？ナニお袋のとは聞ずとも好い、子供はどふだ。

ハ氏は手づからコップへついだポウト酒を一口飲んで、また杯を手に持ち、ひかへめに、

御意に御座り升が、何分七歳といふ御弱年で御座り升から御性質を仰られましても、一寸、お答に苦しみ升て。

これを聞いて、老侯の疑惑、掛念はます〳〵熾んになり、早くも彼の眼光を、ハ氏の方に放つて、粗暴に、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ナニ、馬鹿か?、たゞし、不器量な犬つ子の樣な奴か?、腹がアメリカだといふ處が、現然と見えて居るのか?。

イヤ、お腹がアメリカの御婦人で、此弊が有るといふ處は一向見へぬ樣で御座り升。愚老は子供のことは至つて疎い方で御座りますが、いづれかといへば、先立派な若君と勘定いたしました。

例の沈着、冷淡な調子で答へました。ハ氏の物云ひは、全躰、平常が落ついて、油の載らぬ方でしたが、此時は殊更普段より扣へめにしたといふものは、侯爵どのが餘り委しく實際を御承知ない中、不意に孫息子に面會されて、自身に判斷を下された方が、兩方の爲に宜かろうと、怜悧にも考たからでした。

どうだ?、壯健で、よく伸た方かな?。

御意に御座り升、殊の外御壯健で、御發育も甚だ宜しい樣見受ました。

侯爵どのは、一層急き込んで、

ナニカ、手足などもすらりとして、外見は好い質か?。

此時ハ氏は薄い唇の邊にそれとも分らぬほど幽かなほゝ笑を現はしましたが、コート、ロッヂで見て、今も眼の先に見える樣なセドリックの姿、さも樂しそうにしどけなく、虎の革の上に横になつた畫に書度ほど見事な處、キウ〳〵した毛が革の上に亂れ散つて居た塩梅、櫻色のパッチリした幼子顏のとなどおもひまして、

先づ一と通り立派な御人品の樣見受ましたが、斯樣なものは、愚老の判斷甚だ覺束ないものと、御猶豫願ます。併し御前のお眼に止まりました本國生れの童兒と、多少趣味の變つた處は、必ず御座りませう。

老侯は急に足部を襲つた酒風症の苦痛に、イキマキ荒く、

そうわろう〳〵、米國の子供といへば、禮儀作法も知らぬ乞食めらじやといふとは、いつも聞くとじや。

御意に御座りますが若君に限つて無作法なお振舞は決して御座りません。只今本國の子供と違と申上ましたは判然とは申し悪う御座りますが、同年輩の者よりは、成人に交られた故かして、幼稚らしい處に、又成熟らしき處の混淆して居風采を申上たので御座ります。

イヤ、それが即ち米國風の無作法と申すのじや、兼て聞いて存じて居るは、キヤツ等は、それをば早熟とか快闊とか申して居るは、何れ、氣色に障わるほど不行跡に違いあるま

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

い。

ハ｜氏は又少しポート酒を飲みました。此人は侯爵どのに對つて決して論辨を試みたとはありませんかつた。別して御足の御持病に侵されて嫉衝して居る時などには、寄らず、觸らずにおいしらうが上策でしたから、此時、數分間双方沈默でした、

其うちハ｜氏が、

エロル夫人ゟ御前へ申上る傳言が御座ります。

老侯は又獅子の吼へる樣な御聲に、イキマイて、

傳言じやと、あれからならば聞度くもない、あの女のとは、なる丈聞せぬ樣にして貰い度い。

御意には御座りますが、此傳言はチト大切な一條で御座ります、と申すは、夫人へ御恩賜あらうといふ年給を御斷り申上る旨申出られた次第で………。

侯爵どの、ギックリ驚ろかれた樣子にて、又大聲に、

ナニ、なんと申す?、それはなんじや?。

ハ｜氏は、前申した通りに、再たび陳じました。

夫人は決して其金子を頂戴する必要はない樣に申されます。增して御前との御交りも、御親密と申すではなし……

此時老侯は烈火の如く怒り、さながら言葉を吐きだすが如く、

ナニ、親密でないと申すか?、へ、ン、親密どころでは有るまい。あの女のとおもふても胸がわるいわ、チヨツ、舌長い、貪慾なアメリカ女め!、見度もないわ。

御前樣、恐ながら、夫人を貪慾と仰せられますは、チト愚老の胸に落入り兼ます。一事の請求をなされた譯ではなし、只御恩賜の金子をお請せぬと申丈では御座りませぬか?。」

それも是も策じやわと(跳ねつける樣な調子に老侯どの)わしをひとつはめて、面會でもさそうといふのじやろう、只今の樣に申すのも、必竟わしに精神を感服させて、一仕事と考へて居るのだろうが、そうは參らぬ、わしは一向感服致さぬて、それが米國風の出過といふものじや、此屋敷近い處に非人如き生活をされてはわしの迷惑じや、クオントルロイの母で有つて見れば、生活も相應な格にさせねばならぬと云ふものじや、兎に角金はとらするが好い。

たとひ、金子をお遣し有つても、お用ゐはあるまいと存じられます。

老侯は又クワツトして、

つかわうが遣ふまいが、それにかまいはない、どうでも遣わすとせう、わしが何もして遣わさんから、非人の生活をせにやならぬなど、、世間へ觸れられては大した迷惑じや、ハ、ア、ひとつは子供にわしをわるく思わせうといふ手じやな、さもなくとも、わしの惡口は充分吹込んだのじやろう。

イヤ、左樣あとは一切御座り升まい、夫人より傳言の御座りました處をお聞とりなされませば、左樣あとは一向あいとが判然いたしませう。

老侯は憤怒と、性急と、痛症とにて、苦しげに太い息をつき、

左樣あとは聞く耳持たぬわい!。

と鳴せ玉ふも、かまわず、ハ——氏は靜に其傳言を述ました。

夫人が申し出られまするには、御前が自身を忌み給ふて、フォントルロイどのをお引別けになつたものといふとは、なる可くフォントルロイどのに知らせぬ樣御注意を願度い、と申す譯は、フォントルロイどのが、深く自身を慕わるゝ處から、萬一老侯に對して隔意を生じてはと、掛念されるので、到底眞の理由は會得の出來ぬものと見做し升れば、若君が多少御前を憚つて、御前に對する情愛が薄くあるかも知れぬと申すとで御座りました。若ぎみは、只今御幼稚で御會得は六ケ敷と故、何れ御生長の後委細御承知になろうと申しておるそうで御座ります、初對面に隔意のない樣といふのが、夫人の切に配慮致さるゝ處で御座ります。

御前はおぼのけにドッカと倚子の脊にもたれて、居られましたが、秀でた眉の下には、武しい、窪んだ老眼が人を射て居りました。忙しい息遣ひはまだ治まらぬ樣子で、

ナント申す?、其とはお袋が云うて聞せぬと申すのか?。左樣ではよもあるまい。

ハ——氏は冷淡に、

イヤ、御前其とは一言も申して御座りません、それ丈は保證いたします。若ぎみは最も情愛深き御祖父樣と信じて居られます、誠に完全無欠の御性質と確信いたされる其點に於て疑を引起すことなどは、一切お聞かせ申したものは御座りませぬ、况して二ユーヨウクに於きましては、一々御指揮の通り取斗らひましたれば、御前をば非常な慈善、寛大の御方と思ふて居られ升。

それに相違ないか。
イヤ、其と計りは愚老幾重にも保證いたし置升。さて、これから御對面で御座ります、舌長しとお叱りを蒙るかは存じませぬが、母きみのとは一切思ざまに仰あき方が、御上策かと愚考いたし升。
ヘン、七才の子僧が、何を知るものか?。
御意には御坐り升が、其七年間始終母きみが御付添で御坐り升から、若ぎみが此上もなく親愛して居られます。

理學

姉妹の對話

吉田伸子

姉「夏チャン、マア、御行儀の惡るいこと、足なんぞ出して燈がなくつても、お月がよく見えますよ。
妹「アラ姉さんだるいから、今一寸足にアルコールを附けたのですあな……好い心地ですよ、姉さんもお附けなさらないか、而してチヘ姉さん、何故アルコールを附けると涼しくなるのでせう。
姉「それは夏チャンが勉強して早く高等科(小學)になつて理科を習ふと、會得りますよ。
妹「高等科、高等科になるにはまだ二年間がありますあね、それまで待れる者ですか、そんなと云ずに話して聽せて頂戴。
姉「デモ、私は話下手だから、わからないといけないから、止しにしませう。
妹「アーラ、又あんなと云て、五月蠅ものだからよう御座す。
姉「そんなに憤るものではありませんよ、そんなら話すから。アノソラ、先刻次(下女の名)がお庭へ水をまいたら大層涼しくなりましたろう。あれは子、少しは水が冷たいから涼しくなるのかも知ませんが、素と水やアルコールや香水のやうな諸液躰が蒸發して立つときには、澤山熱を要します。それだのに庭にまかれた水は、其熱を別段外から得ようがないから、近傍の熱を奪て去ます。それ故庭に水をまくと、涼しくなるのですよ。若そうでないならば、水と同じ冷さの土をまいても、同じとで有そうな者ですが、それでは決して涼しくなりませんのサ。矢張それと同じことで、アルコールも足に塗ると、其アルコールが蒸發して立つとき、足の熱を、

奪て行くから涼しくなるのですよ、會得ましたか。
妹「それでハこれからアルコールの代りに水を塗ませうか。
姉「水でも少しわ涼しくなりませうが、アルコールのようにはゆきませんのサ。
妹「なぜです。
姉「それはね、アルコールは水より餘程蒸發し易いものです、それゆへ、從て水よりわ熱を奪ふことも速かです、だから水を塗よりアルコールを附ける方が、涼しいはづではありませんか。それと同じ理で、アルコールより蒸發し易いエーテルと云ふものを、大きなコップに盛り、其中に少許の水を容れたる、試驗管と云ふ細き玻璃管を入れ置て、小さな鞴で空氣を送て、ズン／＼蒸發させると、其エーテルが非常に速に熱を奪て立つものですから、試驗管の中の水は直に結氷ますよ……………アラマア、夏チャン、夏チャン、風を引くといけませんよ、蚊に食われるのも知ないで、私が月を見ながら調子に乘て話して居たら、眠てしまつて、それだから始めから厭やだといつたのに、もうこれからどんな面白い談があつても話さないからようござんす。

隨感

○メランコリッシ　しのぶ

メレイ、ライヲンの云く、時としてわが憂鬱となるは、心に利己の念きざせばなり、人の事を思ふ切なる折は、たえて憂鬱の情を發せずと。實に知言と云ふべし。小止みなく働らき、坂を降るが如くたゞ動きて止まざる時は、遂に心底の現象を省みず。左れど、安息の日、躰を伸し、胸を靜め、つく／＼と我が有樣に考がへ及ぼせば、悲しき念ひ悽然として湧き出で、四面心ぼそ氣にて、天地何となく鬱々たり。伏して祈れども精神定まらず、道念をよび覺すといへど、元氣俄かに到らず、坐ろに憂いを增して、底止する所ろを知らず、いよ／＼思ひに沈みて、穴に入る心地せり。時に端なく、ライヲン女史が知言を想起し、電光の閃めくが如く豁然として悟る。ア、われ今や利己の念に滿たるなり。

○山師　みどり

風來山人は嘲けつて云ふ、山師、山師、山師、世間智慧なき人、智慧ある人を見て、山師、山師と云ふと。左れど、山師必らず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

しも智慧あるものにあらず。彼の預算精やかならず、經綸固からずして、忽焉一朝に大事業を成就せんと欲するの族らは、俗眼之れを見れば其の器甚はだ巨なるが如し、實は至つて小さきものなり。彼は、思想を永遠に走らせ、計畫を末代に遺し、一生を埋めて非凡なる偉業の礎となすの勇あるとなく、己が目にてわが事業の成るを數年の中に目擊せざれば承知せず、量の極めて小さきものにあらずや。經に云く、見ずして信ずるものは幸ひなりと。吾儕もし正路に力を捐つれば其事急に成らずと云へども、遂に其精神の徹せざるヿなし、然らば未だ其事業の成就せるを見ずと云へども、既に其后日に必成すべきヿを確信するヿを得。ゼヲヂ、ミウレル曰く、余は眞ヿに祈り得るゝときは、既に其事の成れるヿを信じ、預じめ感謝すと。此れ豈に非常の大器量、大精神にあらずや。心此の巨信を懷く能はず、促々として成るを短日月の中に見んヿを欲す。かゝる山師は小山師にして、智慧の至つて淺墓なるものなり。秀麗高大の量あらんものは、望みを更に悠遠の地に置くべし。

雜錄

負債を疎畧にするなかれ

蓮峰外史

杜少陵は酒債尋常行處に在るが爲め日々春衣を典して言譯を爲し一休は木賃宿に長逗留して拂ひかねたる借金をまさか嗽ばらいにもまぎらはしかねて一場の法談にて其の場をまじくないたり樂あれば苦あり酒を飲で陶然たる翌朝は衣類一枚してやられ一夜の安眠を貪りたる曉は一勞働も爲ねばならぬこれ世渡の定理にして孔門傳授の心法かは知ねども兎も角も久しく差ふを恐るゝは借金返濟の道にぞ有ける自己は借金を嫌ふこと蛇蝎の如しそは壹圓貳圓とかさなりてはては十圓二十圓と長足の步を進めむかで山のむかしもさこそと思ひやらるゝ程手も首も回らぬやうにまきつかれ世間へ面皮は勿論か き低き敷居も小佛峠佛の顏も三度とて言れはせまいかとて越かぬるに至らん天地は究窟ならず人には自由の權ありとかやさるにわざ〳〵借金に其の身を賣りいとにあやつる猿の如く借金の爲め朝暮てんてこ舞して世渡するもあさましけるわざならずやさりとて世間は不思議なもの借といふ字を貸と解し

四分五分言わずに利足の返禮これさへすればもう義理はすんだ樣なものとすましこんだる人も多し借る人は耻を知らず借す人は慾德づくかりずからず簞食瓢飲九尺二間の裏ら家に住居してもむしろ借金せぬがましとずんとすました其狀を孔夫子がみそなわし賢なるかな回やとめつたむしように賞られたり借金して世間躰をつくらい衣服調度を美麗にして後を向ては貧乏神前を向ては福の神早がわりして世間の人に見せてもいとしかわひの妻や兒は二十御座の神樂を見るより面白からずこれさへ靑くなり赤くなり良人の爲めに言譯せり返へす方法あればこそ借金はするものゝ返へされぬと知りつゝ人に物をかるは愚なるの極なるべしといへば笑ふ人あり久方の月さへ日の光を借りて返すことなく美麗に世間を照し露もまた月の光をかりて貫きとめぬ玉の姿をやつすにあらずや他の餘光をかりて世間躰をつくろひ紳士貴女と心の寒くなるまで人にあふぎたてられ一笑だにも買がたきせちがらい世に甘きものの喰あきし御かひこぐるみで一日なり半日なり過すが德用孔門の人々はどれも遣繰りの下手なればこそ遠方から米を負ひ勞働しても敝温袍を衣たり淸貧を甘ずるとか言ふて自己がいくじの無きことを言譯する原憲の如きもの少なからずそは先生始め累々として儒家の狗の如しと言れる位なれば左まで怪むに足ず管子の貧樂も蓼喰ふ蟲の類なれば誰もかくこそあれかしとは言がたし時間が金の世の中に大根菜根を喫のみにて百事滯りなく出來ると云ば裏居に住む人もなかるべし人力でも茶漬に香物で世は渡られぬといふに非ずやかりの世に住む吾々がかりて損するためしなし西洋料理を借りて一度饗應ば人も早晩櫻雲臺の會席位に招待す一度かりて二度の馳走に際會するもまんざら無益にはあらざるまじ金を借すはシャボンや鰹魚をかすの類にあらず德つきて戾ればこそ鬼の樣なる高利貸も地藏面して貸てやる借る人なくば銀行も如何か繁榮するを得ん商法上手と言るゝも賣るより借すことの上手なり又世才に長たりといふも借出こと〻遣繰の工夫上手なるを言なるべし故に借のも人の爲め又貸すのも人の爲め兎角世間は相持でなければ渡られはせぬものなり借貸なくば東京の大都會も不景氣からつゝき花咲く春もいと淋しく人烟を見ず空しく花を見る凄滄悲慘の場所とはなりぬべしとて敵ずもがなの雁首をカチン〳〵と二度三度灰吹に當てすりて答たりそれ

貧富は天の配剤にて人の力に及ばねど足を知り分に安ずるを以て貧に處しても困苦を覺へざるなりさるを隣家の貨を羨へて五欲の海に沈み借金しても出來ぬ驕奢をして見たく煩惱の犬に追れて彼處是處を駈回り一枚看板の常倚羅を飾りて紳士貴女を裝ふも當抵借るのが目的なり借金の奴隷となりて蛇に見込れたる蝦蟇の如く後へも先へも行がたき立往生となるにあり親の彈機で飛出した箱入息子社會へニヨツキと顔を出し官員樣と擧たてられ紳士とはなりたるものゝ金を撒かねは名擧は來らず長官の御鬚の塵積り易きを如何にせんいつか借金に綱をつけられ危險の地とは知りながら頼むやうにして入込んで見てもなさけなや非の字はまさしく頂戴いたし青くぶらりと日向のヘチマ民間へ下りて見ると甘き露にはあり付がたく思はぬ方より借金の蟻に付かれて居催促今日一の公債をうり明日一の株券を與へ一夕安寝することを得たり起て門口を眺むれば執達吏又來る明日にも知れぬ難場に坐して泰山の安を誇り榮花の夢の覺ぬがくやしと氣をもみじのかしらふも切れず親類縁者の御厄介下女下男に暇を遣し御ひそうの啣平幼名おしやます八見信助等がテンニヤワンニヤに別を惜むを見かへりもせぬ引越騷動昨日までは蝙蝠傘をさしかけさして貳人引の車に乘りたるスウイートホームの御大將もさすが軍配まわりかねその身その儘徒あるき續く從者もなく斗りいよゝ城を明渡し終に借金の虜となれり要害は掌を返す社會にありて可恐しき借金を容易なことゝ思ひ一寸先は暗夜なる行路の難所をも注意せずに進み行くこれぞ明治昭代の弊患なり借りても金さへ嚢底にあれは紳士とも貴婦人ともなりて社交の都合もよかるべしと前後左右を顧みす田舍の大盡も都の料理とビールの味に芋や乾瓢の御平を忘れ身代限を爲すものは恐ろしき借金病あり世に仁者は富まず富ものは仁ならすといへり何か故に仁者は富ぬかといふに無理な驕奢を爲すことなく入るを算りて出すことを爲し應分の生計を營て身は借金の羈束より脱れんと欲するなり富めるものは足ることを知ずはますゝ貨に眼目が眩み人の財産を鯨飲にして自己が懐を布袋の樣に澎脹らかし手數料のおどりのと種々の名義をつけて義理も廉耻もあんのその人の褌鼻褌の相撲か一番上分別と思ひ遂に貪慾邪智に迷ひ込みて慈悲の心は自然と消滅するに至るなり家政の要領は金錢出納の道に注意するとこれあり足らす

は他より借りて賄ふゆへ世話も心配もいらぬ事尤良人は社會へ出かけ金融すべし賤妾は良人の交際を助けて人の機嫌をとり何事もそらさぬ樣とり持するとこれ豈細君の本分ならんや婦人の中には稍もすればかしこの耐交此方の宴會とて家政のことを外にして尻は一寸もをちつかず走馬燈の影法師其の日〳〵の風次第走りまわりてよきことゝ思ふものもまた多しさりとて家政には寸補もなし却て良人とゝもに借金の鬼に攫れ世間も自然狹隘なり閣下の細君喚々と呼れ若樣孃樣の餓鬼などと異名せらるも手の裏を返すが如し富貴に素して富貴に行ひ貧賤に素して貧賤に行ふこれこそ處世の秘訣なりとしいへば家政に意を用る人は豫め貧富の境遇に處するの道を知ざる可からず漫に名譽と外見の爲に借金の束縛を蒙る勿れ。

油畫彫刻展覧會漫評

無名子

當時上野公園に開設中の明治美術會の展覧會は出品も既に整頓せると云ふとにて今や百有餘點に上れり同會今回の展覧會は初め出品の數甚だ少なしとの評ありしが此の陳列所にしては寧ろ此位の出品こそ却て適當ならんと思はるゝなり畫を好ものは只無暗に其數の多き耳を願はざるなり余は寧ろ成る可きなら此出品をも今少し減じたく思ふなり若し眞に逸品傑作のみなりせば二十幀にても可なり十幀にても亦可なり見れば見る程妙所を覺ゆるの善畫なれば一圖を見にも充分の時を要するなり見るを厭の悪畫あれば數百幀ありとも何の用をか爲さん否寧ろなきに勝るなり余の願所は其宜しきもの耳を取て充分に見好く齊頓して錯雜せぬ樣陳列に意を用ひて貰ひ度懇望するなり只少しく今回の展覧會に物寂しく感ぜるは此道に名ある人々の作物の餘り多く見當ざるの一事なり筆を取に無性なるは大家の常とは云乍ら大に遺憾に思はるゝなり何卒反省を乞度ものなり然し總躰より云ば一回は一回より進歩の跡見へて見る可の作物亦少なからざれば其中眼に止し物に就て聊か妄評を試む可なり福原馬三郎氏村巷の圖村驛の軒を連て其行次を亂せる樣路上の閑靜なる處寫出して大によろし且着色澁滯なくして輕こなされたり只白雲の横はる所チト强きに過たらんかと思るゝなり同氏舟橋の圖兵糧方の渡る處を見せたるは御趣向なり然し着色は前の圖に劣りたらんか岡精一氏農家の圖農夫の耕す所桔槹の閑なる所長閑なる春晩の景大に

愛たし岡部昇丸氏想像人物肉色の樣子頭髮の鳶色ある所内地雜居後の令嬢と見受たり然し右の頬の脹れ出したるは何か分け有るとなるが惜む可し同氏處女陷貧悟樂圖畫題の意味は評者には分らず此の圖は前回より一層頬の脹れは著るしく見へたり涙の下る處を見れば虫齒の惱みの烈しき所にてもあらんか揚虫三郎氏花下の宿題意優にして面白し兜軍扇の出來は見事なれど餘緑の草は青き毛の敷皮を敷きたる樣見へて大に忌はし同氏渡邊華山の圖畫題の取り方は塲中第一と思へり器具衣服の樣子は用意の所見へて大によろし華山の顔色も失當ならぬ樣見へたれど着色頗る黒づみて漆喰細工の浮畵じみたるは甚た遺憾なり龜井至一氏汝の物にあらず相不替奇麗なり小兒の鞠を持ちたる樣子は餘念なげに見へてよろし犬の出來はちと落ちたらんか同氏猫兒の圖子猫の情は見へたり後ろの地は今少し工夫あらまほし本多錢吉郎氏山驛の圖着實の作大によろし彩色は一樣に失せるなからんか廣瀬孝二郎氏田舍道の圖菜花の咲亂れたる所麥畦の渺々たる所殘花の點綴せる所晩春の趣大に妙なり路傍に飴屋を圍んで村童の群れ居る所又大に野趣を助けたり然しちと畵の統一を缺きたる樣あるは玉に疵と云はんか飯田雄太郎氏櫻花の圖着實にして無難の出來と云ふべし。

松井昇氏山村の圖山腹人家の點綴せる所麥畦處々人の耕す所重巒相圍む所寫得て妙なり只惜むらくは全色の額畵をして弱きに陷しめんか渡邊迷香女史相模の圖閨秀の筆には似合しからず且つ女史平生の擧に似ず不出來の方と云ふ可し原田直二郎氏老婆の像着色見事なり何所でか斯んな人物に出合たる樣覺たり實地々々角井厚吉氏杜鵑自由に聞く里ふりみふらずみ五月の空寫出して見へたり盖し着色は餘り黒ずみて强に過ぐる樣思へり生出龜之進氏水彩獵罷歸來紅葉路流暢の出來悦ぶ可し渡邊鍬太郎氏水彩義經院參の圖小品纏り能く愛可し水野某氏緋の袴の圖着色美麗悦ふ可し加地爲也氏獅子奮鬪の圖一對雄偉の作塲中にて眼に付物なり其中勝利の圖の方同氏の勝利と見たり同氏出品の中にてはくれをん畵婦人の像第一ならんか流麗にして輕妙の作技倆の程見耐へあり佐久間文吾氏關江長江の所々洲をなしたる所兩岸の草木燃へんとする樣中流に網を投ずる所總て得も云ず流麗の作愛べく悦可し强て難ずれば綠色餘り一樣に過て畵の奥行を害る勿らんかと思り大矢

透氏廢庭殘香、野渡秋晩、共に快濶の作悦ぶ可し廣瀬氏權兵衛種蒔の圖奇想悦ぶ可し就中權兵衛の後に覗ふ處の烏大に妙を覺え同氏野渡の圖完作輕妙愛す可し西村新一郎氏首夏の山水又輕妙澁滯なく悦ふ可し同氏驟雨一過の圖布置無難にして難ず可き處なしと雖も前圖の方勝りたらんか岡精一氏美人の圖衣服の彩色美麗悦ぶ可し顔色は生人形じみて感服せず五性田芳柳氏菅公詠梅圖彩色美麗且つ健筆の跡見へたり菅公の容貌前回出品の實盛に似たと云評言あり然し菅公として又失當ならずと見受けたり只惜むべきは梅樹の筆法活氣なくしてノロ〳〵としたるは疵と云ふ可きか、渡邊文三郎氏雪景山水着色澁滯なく技倆の程を見たり三輔大二郎氏漁磯の圖砂岸漁舟を引上げ漁夫網をすく處布置齊ひ形狀宜しきを得たりと云可し然し着色は甚だ劣りたり無難の出來なり同氏富士山の圖得意の圖難ずべき處なけれどあまり度々にてちと倦きました印藤眞楯氏石橋山の國鎧武者の組合せ骨折の程見へたり着色の精細なる亦用意の跡を顯はせり然し畵中餘り錯雜して折角の骨折を打消したる樣見へたり草木の筆法に今少し注意を用ひたらば如何と思はれたり小代爲重氏座敷の圖月琴花瓶掛物の取り合せ至極面白く彩色も美麗にしてよろしけれど餘り扁平にして奥行なきは遺憾なり中本保策氏秋風爲思切、カバンの寫生に書狀と紅葉の枝を添へたる趣向面白し其筆も亦無難なり二神純孝氏敗荷鷺鶯の圖立て長の掛物流の油畵畵題に添ふて御趣向の程甚だ面白し敗荷のくすみたる色合ひに鷺鶯の美麗なる着色と照應せる處用意の跡見へて感服せり猶芙蓉の一枝を添へたる處亦妙なり畵法新機軸にして卑しからざる處敬服なり原田直二郎氏雛祭の圖着色美麗にして愛す可き所あり然し錯雜に過ぎて餘り面白ろからず同氏の筆にしては受取難き所あり戸城はま子女史ヲハヤウ御趣向の程面白し少女の衣服は無難の作と見たれど顔面は今少しあらまほし深田憲治氏墨畵肖象墨畵中の逸品なり常井久太郎氏墨江少女の圖都躍榮喜氏水彩武具の圖又好す可し宮武某氏淺草觀音堂の圖堂内の寫生無難なり人物は甚だ不出來除く方可ならん倉田弟二郎氏墨畵農家の圖一對着實好す可し以上列記するもの場中の重なるものと見たり中には隨分露店の石版畵にも劣りたるものも見受けらるゝ樣なれど見ることを厭ふて過ぎ行きぬれば評を闕く惡きものもなければ善ものが引立ぬとは云ふ樣なものゝ以後は是等の取締りの付くとか其道の人々に尋ね度思ふ也。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

家政

禁酒のホーム

安藤太郎

拂方町に於ける安藤君の演説中左の一節を拔抄す。

豆州の三島に、傳吉と云ふ車引があります、其車夫に私は遇つて談しをしましたが、もとは實に驚ろくべき酒飲であつて、身躰もシツカりして居る。三島の曳子の中で、一と云て二と下らん其位に繁盛もし、人にひいきにされる。此位な車夫でも、年が年中貧乏暮しで、私が聞た一つですが夫れを御談すると、或るお醫者さんが恐ろしひさむひ晩に車を曳かせると云て傳吉の家へやつて來て見ると、板のまに莚を布て、子供と女房と自分と三人が人力にかけるブランケツトをかけて實にさむひ肌をつんざく樣な冬の夜に、親子三人がすり寄て震へて居るのを見て、實にひどひ、是と云も只酒の爲めだ、毎日〱、仕事があるとあつただけを飲んでしまふ、またあるのまでを當にして飲んでしまふ、實に談にならん。また夫れが自分丈りなら宜しひが、子供も妻も耐らなひから與宮花さんと云ふ當地の熱心な禁酒會員が、だん〱意見をすると、ソーするとひどひ、此剛のものです、あたりまへのものあら喧嘩より仕方のなひ此傳吉、親の生命にも更へる事が出來なひ酒だと夫れ程に云て居る大酒飲が、かよはひ婦人の忠告に依て、迷ひの夢が醒め、ガラリとかはり、身震をして「禁酒と云ふとが出來るもので御坐りますか、私は今と云ふ今禁酒する心が起こつた」。

貧乏で貧乏で乞食の樣に暮したも、只酒の爲めである。夫れから與宮さんは酒を止めると云た彼の傳吉の樣子を朝に晩に目をつけたが、さすがにソンな奴だから止めると云たらスツパりと一口も飲まなひ。ソコで此男の酒を止めたは一昨年の十一月、其の時に熱海へ供に連れて來た、其の途中で意見をした。夫れ故一昨年の十一月に止め、其の次は十二月、當り前の事ですが、十二月の末に餅を五十錢搗事が出來た。あなたが五十錢と云たら可笑く思召しませうが、傳吉などは八九年の間餅處デワなひ、自分の家で餅なんか搗いた事はなひ、大概外から貰らふ位の事であつたが、夫れからまたことしの春は二斗の餅をついた。夫れから自分が取た金が、只餅ばかりヂヤありません、是れ迄は外に出て酒を飲むでかへる、家に

かへると子供をなげる、女房を取て蹴る、子供は親が家へかへる事を恐れて外へ逃げる、女房は打たりたゝかれたり、更に談にもならない樣子有樣でありましたが、酒を止してからは、少しばかりの菓子でも買て子供にやると云樣にしたから、酒を止めてからは、子供が門に立て、お父さんの歸りを待て居る、食物をはやくむすこにやりたい、早く小僧の顔が見たいと思ふ、女房は着物を作て呉れる、晩になると家で二人して金の勘定をする、女房もにこ〳〵する、始めて女房と云ふものにもにこ〳〵する顔がある事とわかつた、子供の可愛い事がわかつた、今迄は子供は餓鬼、女房は山の神と思ふたものが、初めてにこ〳〵するものかと云ふ事がわかつた。實にひどひものヂヤ御坐りませんか、車夫の傳吉が酒を止めた計りで、まるで傳吉の家には小さい天國が出來て居ります。女房も子供も傳吉と一處になつて、にこ〳〵して居る、小さい天國で御坐り升。酒の爲に家を地獄にして居るものが、此世の中にはイクラあるか知れません。

文學

菊女の夫采女に贈りし艷章

南條漫史

此の一章は、余の西京に在りし頃、古書肆にて寫本隨筆錄などを購ひたるが、その中にて見當りしものなり、爾來余が文房の珍客として、繙く度に厚く待遇し、吾ほその詞をば諳するに到れり、訊に係るゝ愛戀の筆とて、悲婉の情かぎりなく、而かも淫褻いとふ可き節なきは、關雎の旨に適へるものにて、樂みて淫せず、哀むで傷はざるものとや謂はむか、元と此の菊女と云へるは、小西攝津ノ守の娘にて、九州島津家の家臣瀨川采女なる人の妻となりける、天正二十年の頃、夫采女高麗へ渡りて、久しき間音信なかりし程に、菊女此の艷章を認めて、彼地へ遣りしが、その便船、九州沖にて暴風に出會ひ、上荷など多くはれけるに、かの文箱も其の中にありて、海中に浮びしを、程經てさるものゝ手に引上られ、遂に秀吉の手許まで屆きぬ、秀吉これを一覽して、深く菊女の心を憐れみ、早速瀨川采女を高麗より召返して、再び鴛鴦の婚盟を結ばしめけるとなむ、此文は即ちそが海上に漂ひしものなりとぞ、余今これを女學雜誌に寄せ、汎く同好の方に頒つと云ふ。

たよりの船を待ちえて、すゞろに筆の立所も覺へおはしまし候はねども、立別れ參らせしより後、ひと知れずひとりこがるゝ胸のけふり、晴るゝ間もなき涙の雨一かたならぬ思ひのやみに、ふし沈み、いつを限りの露の身の消へ果てぬ間に、哀ばかりかくぞと知らせ參らせたく、硯に向ひ取る筆のすみも涙に流るれば、

　ゆく水にかすかくよりもはかなきはおもわぬひとをおもふなりけり

と、よみ置和歌のふる事も、我身の上とあわれにて、中にそひ參らせぬ昔しの戀しさ、只御おしはかり成され給へ候へ、いかなる神の御引合にて、かゝる淺はかなき契りとは成まいらせ候や、會者定離の習ひ今さらおどろくべきことと、女の身にても口惜しく御入候まゝ中々浮世になき身となり參らせ候はゞ、まだ生れあわぬ後の世を、賴み參らせ候中に、これはまた唐土とやらんに御渡候へば、限りなき海山を隔て、たがひに風のたよりの音づれをさへ、聞まいらせず候へば、今一しほのおもひ、身にたへかれて、只かりそめに引合給ひし中だちをさへ、うらみ

いんばかりにて、過し頃夜もすがら語盡し手枕にきぬ〳〵なるあけがたに、身は樂しくてさすらへぬども、君があたりさらぬ鏡のかけははなれし、その古歌のごとく、是をかたみと御たゝう紙ながら殘し置給ひし鏡、誠に〳〵袖より外にもらすかたなく、うらみては身をかこち、朝な夕なにうちもわかれぬものながら、面かげを夢にさは見參らせぬ御事のかなしきに

おもひつゝぬれはや人の見得つらん夢としりせばさめさらましを

と小町が讀みしことの葉も、只いたづらにうき世ばかし

かぎりとてわかるゝ道のかなしきにいかまほしきはいのちなりけり

誠やみづからもかひなき命なるらば、今一度逢まいらせんと、おもふに付て、あたなる露の玉の緒も、なかゝれとのみいのる計にてそろ。その上唐土へ行舟をしたひ、なぎさにふしゝつみし松浦さよ姫が思ひも、今の我身よりいかでまさり候はんや、あわれに思召し出され候はゝ、おん嬉しく、おはしまし候へ、く〳〵（此處原文詳ならす）申度御事ともは四方にも餘るばかりに御坐候へども、あわたゞしき出舟のよし、申候へば、いさゝか御殘多く書き參らせ候、何事も〳〵めでたくかしく。

くり返し〳〵其後の御ゆかしさは、いかなる折節にか露ばかりも承はり候はんや、あまりに人めもはつかしく。つゝむ涙のこぼるゝを。おそふる袖も朽ばてゝ。やつるゝまゝの戀衣。君ゆへ斯くとおもひまいらせ候へば。我ものながらなつかしく。なを出やらぬ衆屋のうち。深きおもひの淵となる斗にてこそ候へ。

樂くあらむ行衛も志らでたのみつる我こゝろをばたれにかたらん

待送る我手ながらもうらやましこひしき人の見るとおもへば

此歌。みづからが思ひこがれし心のうちより。筆にまかせ參らせ候。そもじ樣の御植置き給ひし花。今ほど彌生中頃の御事に候へば。うつくしく咲亂れまいらせ候そもじ樣の御かたみと明くれ詠め入參らせ候。散らばゝ何を便に心をなぐさみ候半やと。うちなげき。やう〳〵あくれは花をちらす嵐をうらみ。くるれば衆屋の内へ入枕さしてふし。更に目もあひまいらせず。人目を忍び。花園に立ち出でくるれば夜もすがら月を友としひとり心をすまし。ものかなしき御事とこそ。御すひし給はり候へ。先に申候はんを。出ぶれにていそぎ候ゆへ。文の志たひもちがひまいらせ候。ふる年きさらぎも。うちすぎ彌生十八日に。うつくしき姫をもふけ參らせ候。晝はひざのうへ。夜はよもすがら。肌をはなさず。そもじ樣にそひまいらせ候心ちいたし。そだてまいらせ候。扨〳〵同じ世に住ながら。かやうに遠き、海山を隔て。明け暮心ぼそく候まゝ。わが身のうきいのち。露とも消えまいらせ候はゝ。やがてめでたく御歸陣の折ふし。姫をみづからが忘れがたみと。御詠し下され候へかし。あわれ〳〵たがひに玉の緒もながくおはしまし候はゝ。今一度御目にかゝり。つもる御事のみ語り盡しまいらせたく。十四歳よりいさかりそめにも。枕をならべ。いまた三とせにもなり候はゝ。かやうに行わかれまいらせ候御事。いかなる罪のむくひぞと。料なき神や佛をかこち申斗にて。こま〳〵と申度御事。浮世の紙ふでにも盡しがたく御入候まゝ。先々めで度筆をとめら〳〵し。

小説

マイルスタンヂツシユの戀

第五回（下）　　愛山生

潮時を失はんことゝ風の東に變らんとをきづかひて稍いらだちながら、身の樣方形にて、なさけ深く且剛き船長は海水のにほひを身の回に撒しつゝ其舟に沿ひて立ち此事彼事と話しながらいと廣き己が「カクシ」に書簡と小包とをみたし、色々の言傳に其小き腦髓を混雑させて終には全く昏迷する計になりぬ

ジヨン、アルデンは小舟に近きて片足を舟端になげ片足を礎につけ今將に出立んと仕度し乍ら舟の横に立し水夫と暫ら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

く物語してあり。彼も亦舟梁よりも帆布よりも速かに走る所の失望より逃れ得て時々起りて彼を追ふなる幽靈（渾て彼の妄想苦悶を云ふ）を海中に溺らせんと欲しつゝ往きて其煩悶を殺さんと願ふと切なり。されど彼が群衆を眺めしときに彼等の中に憂はし氣にプリスキラの立ちし姿をば見き。彼女はありし總ての事共を知ずにやありぬべし。彼女は恰も彼の思をば占しが如く其双眼は彼をば見つめつゝありき其哀げなる怨めしげなる、哀願と忍耐との意を表したる彼女の瞠視は將に一步を轉ずれば身を粉にすべき危崖より身をかへせしが如き急遽なる轉意を以て彼の心を其目的より跳り回らしめたり。其神速なる不思議の天性を有する人心は奇なるものなるかな幸も不幸も金剛石の城門が蝶鉸の如く轉ずるの瞬時も存する人生は奇なるものなるかな彼は天を仰ぎて神の息が彼の目をくらまし彼の心を失はせて死地にまで彼をいそがせし霧と狂氣とを散したまひしを感謝しつゝ叫び出せり此所に余は止れり、彼所の空中に棚引る雲の如き白き雲は海を余に指示し海に余をさし招きし手の如く見へぬ、然ども斯る妖怪らしく幽靈らしくあらざる他の手ありて余を支へ、余を引もどし余を保護せんとて抱きかゝへぬ。飛べよ嗚呼雲の手よ空中に亡去れよ、爾は余ををどし余が心を掴がんとて拳の如く廻り來るとも余は爾の威赫を恐れざるべし何なる惡兆をも恐れざるべし、彼女の呼吸せる空氣の如く彼女が步める土地の如く聖き土地、清潔にして佳適なる空氣は外にあらざるべし、彼女の爲に余は此處に止らん而して見へざれども在さゞる所なき神の如くに常に彼女の周圍に翺翔しつゝ彼女の弱きを保護すべし、然り此岩が余の上陸せし當時の第一步たりしが如く、神の恩慈に因て此地を去ることの最后の一步たらしめよ（此地を去らざるの意）と。

時に船長は輕快ながら威儀正しく緊要事あるが如き氣色して注意深き眼を以て潮と風と天氣とをうかゞひつゝ砂上を步めり、人々は彼の周圍に群りて些の別辭をば陳べ言傳をば忘るまじき由をば言へり彼は枕扛の如く人々の手を握りしがやがて小舟に飛乘て本船までいそぎ行きぬ、心中には今までの面倒を免れ得たることゝ、沙と疾と哀の外は糧食に乏しくあまたの聖書の外何もなき土地を去行くとを喜ぶなるべしやがて柔櫓聲中に移住民の最後の別辭は消へけり嗚呼移住民の精神の

如何に剛くして且誠なることよ、「五月花」にて何人も歸らざりし、動に手を置ながら後を顧みるものはなし、一人だにあることなし。

須臾にして轆轤をめぐらして重き錨を引上る水手等の叫喚と唱歌の聲を聞へけり、時に帆桁は結ばれて帆は盡く小息もなく吹くる西風をばはらみぬ、斯くて「五月花」は港を出でガルチット岬を廻り南の島嶼と及び第一逆鬪の地と呼ばれたる土地をば遥か後へに見て順風に乘じつゝ海洲の中につゝまれて移住民の彌增ぬる思の中に包まれて廣き大西洋に出にけり。

紫海の嵐

みさを

第七回

夜色四境を蔽ひ、人かげも見えぬ頃となれば絶えず妖怪あらはれ、惡魔襲ひ來り、不思議のことゞもいと繁し、夜も更けぬれば更らに怪しき事出で來て小石家の内に亂れ降り、百雷のごとく恐ろしき音不意に戶外にひゞき、家内の人ねむる事もならず、殊に陪從の武士と見ゆる人、恐ろしさに絶へずやあるらん、火炬ふりてらし、家の外に立ち出で見るも幾度といふを知らず、何物の變化の災いを爲すにや、こゝは臼杵城内の一小屋、亦親虎が幽せられし所なり、義親が親虎を迫害するの方法とて魔法者となん云へるものして恐赫せしむるなりとぞ、上帝は全能の力あり、之に依らば何事か恐るべき、之に敵するものあらじと泰然たる親虎、心愈かたきは實に感ずべきことにこそ。

斯る方法にて親虎を責めんは無益の事なりとてこたびは亦更に考へをこらし、許多の人をして交々親虎の居を訪はしめ、敎を信ずるの不利、信ぜざる事の榮、彼の不幸、是の富、比較し來らば天壤の差あるを說けるは、昔救主が惡魔に誘はれ、いと高き所より全世界の富貴を示されつ、こゝろみに遇ひ給ひしも斯くやと思ふ計りなり、親虎また固く立ちて動ずる色見えず、否益々强きを加ふるのみ。

今ははや詮方なし、傳敎師に告げて親虎に諭さしめんとて義親より使をもてカブラル大師に云はしめけるは親虎基督敎を奉ぜしより兎角父に從順ならず、父の命に背くことのみぞ多かりける、是大切に訴ふる第一の要件なり、我國にては貴族の人、寺院に出入するはいと恥づべき事なり、然るに親虎領主の嗣子たるべき身にありながら、屡寺院に出入するのみな

らず、衣服を變へ、頸に念珠を掛くる等悪むべく恥づべき様をなす、是主に訴ふる第二の要件あり、第三には我國の封建制度の危殆を來さん事なり、佛教我國に入りしより寺院殿堂處としてなきはなし、之によりて取る所の歳入甚だ多し、さるに若し西教をして國内に傳播せしめんか、寺院殿堂の佛教に關係あるものは悉く打破せざるべからず、是國主領主等に一方ならぬ危難を來さん、されば親虎をして祖先傳來の宗教に復歸せしめ給へとの意を傳へぬ。

聖教の眞理なるは我人等しく認むる所なり、公(義親)も斯く思ひ給ふと思ふ、そは公嘗て若君親虎を我寓居に導き聖教を教へよと云ひ給ひたれば也、思ふに若君は聖教を信ずと云ふの外更らに公に背く事あらじ、公にして若君に迫り、聖教を奉ずるを止めしめんとするは非なるの甚しきものあらずや、蓋し上帝は全世界を統御し、諸王の王、諸主の主、之より貴きものあらず、是大師が先の第一ヶ條に答へしもの也。第二ヶ條につきて云ひけらく聖教を奉ずること毫も恥づべきにあらず、今日日本に於て四万有餘の聖教徒あり、其の内には高貴高名の人少なからず、大村土佐の兩國主を始めとし、大村國主の次子親家其諸侯の親戚にして聖教を信ずるもの多し、されど少しも其高位に妨ぐる所あらず、歐洲諸國に於ては帝王より以下百官有司の聖教を奉じ、寺院に出入するもの夥し、皆聖教徒たるを以て名譽となす程なり、公は如何なれば聖教信徒たるは恥づべしとなし給ふや、實に解するに苦むあり。

其服裝の如きは變へざるも不可なし、只信徒たるの名を支へずんば不可なり、昔聖徒は云へり、我福音を傳へずんば禍なりと、今日の信徒亦此覺悟なかる可からず。

織田信長公は今や勢威漸く日本に偏ねからんとす、而して信長公は兵を擧げしより常に神社佛閣を破滅し、僧侶神官を虐待せしにあらずや、然るに尙今日ある所以のものは蓋し神佛の殿堂は歳入の利害に關せざればなり、公獨り神佛に依らずんば立ち難きの理となすなるべし、是第三の答へなり。

親方更らに語を變へて云はく親虎聖教に熱心なるが爲め我命に從はず、故に乞ふ其熱心なる心を解き、我命に從順ならしめよと、大師之に應じて曰く苟も臣下にして其君主に不忠不義ならんには直ちに之を刑罰に處すべきものならずや、況んや神と人との關係に於てをや、崇奉の念を欠く人は是上帝に

大罪を犯すものなり、我も若君を說きて此罪に陷らしめんか、我亦罪なしとせず、乞ふ我をして罪人たらしめんとする勿れ、公願くは速かに若君に許すに奉敎の自由を以てせよ、必らず孝順温恭他人の及ばざるが如くならんと。

一騎汗馬に鞭つて親虎の寓居に至る、急に報ずるものなるにや、先づ馬を下り、親虎の前に坐し、恭しく禮を爲して云ふ樣、只今カブラル大師の許を訪ひ、いそぎ若君に報ずる事あり、そは餘の儀にあらず、領主二たび大ひに怒らせ給ふて明日を以て領內の聖敎徒を捕縛し、聖敎の寺院を焚き、大師、傳敎師等に至るまで殘らず、刑に處せんとて其手筈既に定りぬ、されば君を始め奉り、聖敎徒の大禍旦夕に迫りぬ、拙者之を憂カブラル大師に就ひて問へり、若君親虎公若し只今聖敎を廢しなば信徒一般の幸福ならずや、されば只今陽に奉ぜずと云ひ實は心中竊かに信じ、他日若君自ら領主の嗣たるに臨みて信徒たるを明言し給はゞ可ならずや、信奉するは心中の事なり、必らずしも陽に云はずとも妨ぐる所あらじ、故に若君は今日父君の命に從がひ、聖敎を捨つといふも可ならずやと、大師大ひに喜び、さなり實に君の言の如し、一時廢すといふも妨げなし、君願くは大師も是に同意する旨を親虎公に傳へ給はずやと云ひ給へり、いかに若君に問ひ申さん、公の御心如何により信徒の禍ともなるべく亦幸福とも變ずべし、大師既に右の言を爲し給へり。公倘頑固にも御心を變へ給はざるか、事急なり、御返答の程承りたしと云ふにぞ、こたびのみは親虎の信仰固き心も迷ひしなるべし。

不思議、先きには死すとも信仰を廢すべからずと云ひしに、如何なれば彼言を爲し給ひしかと考一考、頭を垂れて思ひめぐらし、手紙を認めぬ、騎士之を懷になし、亦馬に一鞭加へて領主の許にと急ぎ行く。

宮中忽ち湧く歡呼の聲、沈思更に憂鬱たり幽居の人、親虎急にカブラル大師に使を遣はす、返報を聞き、切齒慷慨罪を悔ゆ、何をか聞きつらん、先きの騎士に何をか報じけん。

批評

○舊事諮問錄

現存せる舊幕時代の古老に、その上の實事を諮ひ尋ね、史學の材料とす。舊事諮問會の趣旨益多し。其筆記印行せられし

第一巻出づ。

○東光

正教青年會の機關として發兌す。世の正教を誤解するや久し、近年同教がさまぐ\に手を盡し、此誤解を散ぜんとするの苦心想ふべし。吾人夙に同情を表し、其苦心を察す。故に此青年雜誌の速かに發達せんことを希ふの念亦尋常ならず。

○室の梅

女學校より雜誌を發兌するもの目下二つ。關東に「女學生」あり、我社員之を補助す。關西に「つぼみ」あり、大坂梅花女學校の人主として擔當す。而して、此の二つの雜誌は、皆な東西各女學校の連合して維持する所ろのもの也。今や、高知英和女學校は獨力にて月々一雜誌を發し、題して「室の梅」と云ふ。既に第二號となりぬ。文章自づから奇氣あり、躰裁亦た都風に似ず、是れ其の優る所ろなり。

○花の園生

西京佛教花園婦人會より、題號の婦人雜誌を月一回づゝ發行す。賣品にあらず。佛教を種として、世にふさわしき事少しづゝ說き明したるよみもの也。

時事

○クレードル

搖籃は子供を遊ばすの具なり、左右前后に搖動するうち、自づと一人步行の出來るやうになるなり。孟子云く、一亂一治と。時勢大變動の預備は、大率ね斯の如し。

○內閣搖々乎（再び）

又もや變はりぬ。而して此內閣万歲なりとは、誰も保證する能はず。但し、變遷は進化の階なり。

○勸告、辭職

少數の人、騷ぎ立つれば、早皇としてビックリし、四千万の輿論何如にと云ふことを考へざるは素より、本來自個に於ける天職何如にと云ふことも考へず、早速辭職す、火事場の家を見棄つるが如く、大水の田畠を走去るが如し。暫し猶豫せば殺さるゝとでも思ふものにや。

何んぞ辭職せざる、何んぞ辭職せざる、何んぞ辭職せざる。さて先方辭職したり、同輩われ先にと路を爭ひ、互ひに袂を扣へて遂に一處に倒る。

○超然と冷然

富士山の昔し超然と立ちたるは、火を吐かんが爲めなりき、その今に冷然と卓立するは、雪を戴かんが爲めなり。超然と冷然と元と同一にあらず。世事を等閑視するは志士の事にあらず、但だ根底より大改せんとを欲して俗表に清超するは、常に其の覺悟すべき所ろなり。隱逸の人、その何れをか擇ぶ。

○自由黨宣言書

蓋し板垣老先生の筆か、些少の申し分はありと云へど、正に是れ堂々たる宣戰の書、雄思勃々、意想頗ぶる熾んなりと云ふべし。特に其社會的自由論に熱々なる所ろ、太はだ愛重すべし。願わくは、黨內の士、好く先生が誠意に合して、眞との自由論を主張し實行するに堪へんとを。論の妙なるのみ、必らずしも國益にはあらず。

○民權

杜鵑の一聲を聽くが如く、久し振にて「民權」と云ふ聲を聞きぬ。民權新聞第一號を發兌し直ちに停止となる。

○幕府衰亡論

勝先生も存命なり、小栗上野其他の偉人の事を實見せし人もたつしや也、今の中に幕府衰亡の因緣を研究し置くは、頗ぶる味わひあらん、櫻痴居士の所見も亦た一說と見るべし。蓋し、羅馬衰亡の跡は餘りにふるし、藤氏源家の成行も亦餘りにふるし。もし幕府衰亡の事跡を今の明治年代に鑑み來らば、思ひ半に過るもの獨り布衣の書生のみにはあらじ。

○女子教育

格外に保守窟にひそみたる女子教育も、今や機一轉の幸運に際し、將に復た前代の隆盛に進み來らんとす。然れども、當日の西洋狂熱に復せんとは、吾人が尤とも切に反對する所ろのものなり、但だ今の如く一種の新箱入となし置くとは、國家の爲め、女性の爲め、何如にも憂はしき限りなり。而して、今や一陽來復の兆熟す、大ひに廢せずんばある可らず。

○海外の日本婦人

世人請ふ海外の醜業日本婦人を見よ、而して顧みて內地に猥事の白晝公行せらるゝを見よ。先づ、其本に反らずんば、何如にして末を矯めん。吾人が希望は、二號前の社說にあり。

○保育園

婦人衛生會に於て保育園を發起し、五番町十五番地に之を設置して、生后三十日以上の小兒を保育す、衛生上の大家の助力により、鞠養の方法を整理し、慈善と、便利と、模範とを兼

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

備えんとす。吾人太たしく賛成し、頗ぶる其成功を祈る。婦人衛生會は、曩に食物研究會を起し、今亦た此有益なる保育園を創立す。會員の誠意熱心敬服の至りと云ふべし。

○合種孃

本誌第二百六十號に見へたる如く、横濱共立女學校にてアヒノ子の教育は中止せられたれば、今后何等かの方法代りて設けられではと案じたる所ろ、京濱間の外國人有志者中協議し、義捐金若干を以て横濱に女子授産所に類するものを設け、彼の合種孃を教育して之に職業を與へ、亦た學力あるものには教師たるの資格をも授くと云ふ。喜こぶべし。

○離婚法

離婚の嚴重ならんとは何如にも願わし、我國に於ては早く民事法の執行されん事を佇望して待つ。左れど、英國の如きは、其手續の餘りに煩はしくして而して婦人の方に數多の不利あるを以て、今や英國離婚法の改正を要むるの聲やうやく高し。本年の下院に於て、ドクトル、ハンター、がグラッドストーンの繰けを以て提出したる改良案は、少さか此要めに應ずるもの也。案に云く、妻は夫の姦淫の故のみならず、四年間放却せらるゝとによりて離婚を望むとを得と。

問答

◉クリスチアンにて、年齡三十五才にて、漢學、數學、体操に長じ、三科とも今日の尋常師範學校卒業生に劣らず、其他論理、畵學、地理、物理等一通りは出來、尋常科小學教員の資格中、教育學の一科免狀不足のみにて、府下若しくは府の近郷の私立學校に、八圓の月給にて勤め度さ弊社に申來りし者あり、お望の諸君は弊社まで御通知を乞ふ。

◉又尋常師範學校の卒業の女子にして府下に於て教育に従事致し度さ申し來れる人あり、お望の方は同じく弊社に御申越を願ふ。

女報

可愛子編

●皇后陛下の御誕辰さ女學校　五月二十八日、皇后陛下御誕辰祝の折、華族女學校にては、職員生徒等一同校内に參集し、御眞影を拜し、祝詞、音樂、唱歌等を執行し、皇后陛下の萬歲を奉祝せり○明治女學校にては教員附添ひ、生徒本郷中央會堂の祈禱會に望み、陛下の祝福を祈れり○共立女子職業學校にては、校長、職員、生徒一同出校し、陛下の眞影を拜し、萬歲を祝し、且教員生徒に茶菓を供し、終日校内にて隨意遊戯を催せり○京都なる同志社女學校にては、教員生徒、一同校内に參集し、祝辭演説を述べ、祈禱式を擧行し、了て茶菓の饗應ありしさ云。

●皇太后陛下の行啓　三月廿八日皇太后陛下宮城へ行啓。

●皇后陛下より御料理を賜はる　露國皇太子事務に付、御用繁の趣聞こし召され、五月三十日、皇后陛下より、榎本武揚子に、御料理、重の儘賜はりし由。

●東京美術學校長奏任三等岡倉覺三氏　は今度下給俸（年俸金千二百圓）下賜せらる。

●成立學會女子部　に於ては今般新たに技藝の一料を設くるさいふ。

●女子造花傳習所　は麴町區飯田町五丁目七番地國學院向ひ東京紹介社内に設けらる、毎日教授あり、製品の依頼にも應ずるさのこと。

●大日本婦人衛生附屬食物研究會　は麴町區飯田町四丁目廿八番地岡田ミス子方にあり。

●小兒保育園　大日本婦人衛生會にては、先頃より種々計畫の上義捐金を募り、今度麴町區五番町十五番地へ小兒保育園を設け、衛生の學理に適する樣養育するさいへば、小兒を托するには最も適當なるべし、本月一日開院式を擧行せり。

●大日本婦人教育會　は五月三十日、鹿鳴館に集りを開き、添田壽一氏が「在外職業女子の狀態を述べて女子職業の事に論及す」さいへる有益なる演説ありたり。

●女工の年限　印刷局にては女工雇使の年限に制限なきより、貧窮の向は老年迄

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

勤務することを欲し、作業に不利益なれば、年齢五十歳迄を標準とし、此年に達するときは解傭することに内定したりと云ふ。

●産婆　東京府廳に於て擧行したる本年第一期産婆開業試驗に及第し、開業免狀を下附したるは、産婆免狀飯塚八重子外六十一人、仝假免狀堀越トセ子外十四人なり。

●西洋小間物　婦人の洋服着は近頃廢りたる方にて小間物店に影響を及ぼせりと云ふ。

●娼妓の見立番附を嚴禁すべし　雜誌社樓上、筆を執りて編輯す、街頭方に、呼ぶ聲大に、行く足徐々として、娼妓の見立番附を賣る者あり、心なき痴靑年、小兒等之に和して呼び行く者あり、アヽ何事ぞ、吾人は其知らず／＼の間に人を淫靡に導くことを恐る、政府よ請ふ斷乎として之を禁ぜよ、千丈の堤蟻の一穴より崩るゝとを知らずや、此等の事に氣附かずして、如何で風俗の淳良を期するを得ん。

●同志社敎師の送別會　十餘年來日本在住、敎育と傳道に熱心なりし同志社敎師博士ゴルドン氏、及び音樂を以て有名なるヮイコッフ氏は、此度歸米する由にて、五月三十日同志社に送別會を開きぬ。

●京都府盲啞院　は明治十一年五月の創立にて、當時職員十一人、生徒は盲四十七人、啞五十五人あり、既に卒業せし者は三十七名にて、獨立の生計をなし居る者多しといふ。

●畠山勇子の追福　同女が赤心を憫れみて、千葉縣の有志者岡田俊男氏を始めとして、武田信任、石田倉造其他數名主唱者となり、今度盛大なる追弔法會を修し、併せて墓碑を建立し、又遺族へも相當扶助料を贈らんとて、廣く同志者を募りしが、已に貴衆兩院議員、其他官吏紳商中にも贊成者多きを以て、右主唱者中兩名は、其の準備として本月一日京都へ向け出發せしと聞く。

●滋賀縣下の敎育冷熱計　滋賀縣に於て滿六年以上のものにして自己の姓名を記し得るもの、男二十三万二千二百二十八人、女十六万六千五百十八人にして、同じく記し得ざるもの男三万一千百三十二人、女十万五千二百二十一人なりといふ、故に其比例前者にありては女は男の十分の七にして、後者にありては女は男の三倍なりといふべし、又去る五月十七日、縣下東淺井坂田二郡徵兵檢査の際、壯丁一人每に敎育の有無を檢査せしに、眼に一丁字なきもの七百二十八人中二十八人なりしといふ、以て敎育の冷々たるを知るに足るべし。

●慈善家　去る五月十二日午後二時頃、近江婦人慈善會幹事田口義門氏を訪ひ、言葉少なに會長の名を問ひ、些少ながら該會に寄附したしとて、金三十圓を紙に包みてさし出せし婦人あり、其姓名を問へば渡邊愛とのみ答へ、住所は再三之を問ふも答へず、腕車を急がして立ち去しとぞ、婦人の年齢は二十年位、珍らしき心懸といふべし。

●醜業者會議の再報　前號に記載せし滋賀縣下大津なる彥根、八幡、長濱、八日市の四遊廓取締會議にては(一)賦稅金を半額に輕減せんとを請願すると(二)舞藝娼枝一時休業請願のと(三)是迄女工所の設置なき大津長濱に新設することを議決し、組合規約改正、及び稼人規約の件は次回に延し、各地方實試の上に議すと聞く咄々。

●津田三藏の家族　憐むべくして惡むべからず、此事やゝ解りしと見へ、三重縣下にては退去云々ないふ聲も、殆んど立消となりしとぞ。

●伏見文子女王には五月二十九日大阪より微行、兵庫の普福寺、和田岬等御見物あらせられ、畢りて大阪へ戻られたり。

●山梨英和女學校內の私立女子共愛會　は職員生徒等より組織するものにして、會員は每日十五分間勞働して、得たる金を慈善費に充つるといふ。

●又同校の文學會　は每月第二の日曜日に開くと云ふ。

●山梨縣南巨摩郡垣穗村の婦人會　同縣同村の廢娼論者矢崎某氏、昨年來婦人會を設立し、一方に於ては婦人の地位を高め風俗を矯正し、一方に於て密賣婦撲滅に盡力せしも、更に其功なかりしが、氏は更に屈する色なく種々工夫を回し、去月より每戶に出頭して密賣淫の利害得失を懇々說諭せしかば、今は漸く密賣婦の跡を絕ちしを以て村民は大に喜び居れりとぞ。

●第三回信濃基督信徒婦人祈禱會　は四月十七日に開けり、橫濱よりピアソン女敎師、淸水みれ子、片岡はる子諸氏赴き會せり、聽衆百五六十名。

●佛敎式婚姻の嚆矢　去る三月三十一日長野縣南長野萩原政太氏、初めて佛敎式の婚姻をなす、筵席の正面には、施無畏尊の寶號及び亡父の油畫を安置し、香花燈明を供へたりとぞ。

●女敎師グリフヰス氏　山形縣米澤美以敎會にありて、熱心に働かれたる同氏は、今回東京築地婦人傳道として轉任する由。

●仙臺慈善會に於ける小女　去る五月二十三日、宮城縣仙臺の基督敎靑年が開きたる慈善音樂會には、三千餘人の來會者あり(前號に三十一人許とありしは誤)純益金は多分四十圓餘なるべし、同夜會の散ぜんとするとき、十才許の一小女片手に數錢を握り、委員の前に來り「貧民救助の一助とせられたし、これは余の小遣錢を溜めたるものなり、是非差上たし」と云ひぬ、人々其志に感じ、名を知らんと欲し、さま／＼尋ねたれども、答へずして去りぬ、后其錢を調べしに、種々なる小錢合して十四錢一厘ありたり、發起者等は、彼の小女を以て、常夜第一の慈善者なりと歎稱せりとぞ、クリストの榮光此小女に於て顯はる。

●割烹實習　宮城縣尋常師範學校附屬小學校にては、女子の日常必要欠くべからざる割烹水炊の業を知得せしめん爲め、高等科四年級の女生徒に、正科の餘暇を以て、一週一次其實習を參觀せしめ、且時々之を實地に練習せしむる事となせり。

●大に不德僧侶の罪を鳴らさんとす　此頃の新聞紙上に曹洞宗の某老僧が、日本婦人を米國に誘ひて言ふに忍びざる醜業を營ませし云々とありしが、當時在米國の日本人は果して此事とは知らざれども、一老僧が婦人を携へて渡米したる事は確に認めたれば、夫々探知したるに是れぞ天台宗某院の僧侶某の所行と知れしかば、僧侶中の有志家は大に激昻して、是非共彼の不德義なる僧侶に談判を開かんとて奔走中なりと聞く。

●露國今上皇后陛下　は舞踏を好ませ給ひ、御交際極て巧なり、夫皇に對しては貞節に、御旅行の際はいつも御同伴あらせらる、又皇子に向ひては慈愛深し、殊に敎育に御熱心にて。學校へ行幸の時は親しく生徒に接して試驗を行はせらる、又皇后は慈心深く、國中無數の慈善會を保護奬勵せらるれば、貧困難澁の輩は皆皇后の憐を顧ふに至ると云。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

明治女學校々資義捐

音樂會の主意

女子教育の重んずべきは言ふ迄もなし。左れど万事西洋めきて御國の風儀を思はぬは宜しからず。亦昔しながらの舊習に泥みて開化の用に適せぬも益なし。特に愛と貞潔と献身との精神に滿たざる女子は、たとひ文明の藝を學びたりとするも高尙の婦人とは謂ふと能はず。左りとて只だ身を卑下し人類に於ける天の命を重しとせざる女風も亦願はしからず。この意見により、邦家の益、女學の進歩に盡力せんとて、同志の人明治十八年の夏一の私立女學校を設けらる之を明治女學校となす。初めより、同志者の維持盡力を以て獨立し、只管ら其主義を貫ぬかんとを希ひたれば、學校の經濟素より容易からず。只だ志を同ふするもの、内に教え、外に助けて、今日に至れるなり。斯て數年其基礎やゝ備はる。此に於て、其精神を公けに發表し、世上知友の賛成に訴へて、大に校資を募らんとを計畫せらる。妹等太たく、其志を好とし、賛成の念一方ならず。故に知れる人數多の賛成協力を得て、六月二十日帝國ホテル内に音樂會を催ふし、其所得を擧て同校に義捐せんと欲す。此會に樂を奏せらるゝ人も皆な義捐の志に出づ。仰願はくは四方の友、彼校熱心の所望に同情を表し、亦妹等が之を助けんとするの心を嘉みし、當日駕を枉げ、參會清聽あらんとを、只管らに請ひ申すになん。

明治二十四年五月

發起人

島田まさ子
田口つる子
木村はな子

賛成員（イロハ順）

はま子
すが子
かめ子
錠子
小壽子
たつ子
榮子
ひさ子
季野子
花子
ふみ子
豊壽子
吟子
いそ子

波多野傳三郎氏夫人
岡部長職氏令孃
渡瀨寅二郎氏夫人
金谷昭氏夫人
金森通倫氏夫人
吉田仲子
田邊太一氏令孃
田村直臣氏夫人
村岡範爲馳氏夫人
植村正久氏夫人
丸山名政氏夫人
安藤太郎氏夫人
佐々木本支氏夫人
志方之善氏夫人
須田哲造氏夫人

はん子
鈴子
クラゝ
祐子
豊子
銓子
はつ子
きよ子
かめ子
いそ子

ミス、ハリソン
渡邊泰氏夫人
加藤弘之氏夫人
梶梅太郎氏夫人
河村豊洲氏夫人
横井時雄氏夫人
建部秀隆氏夫人
津田仙氏夫人
潮田千勢子
矢嶋かぢ子
小嶋官晉氏夫人
淺井柞子
木村駿吉氏夫人
森嶋修太郎氏夫人

目錄

第一部

演説　島田三郎君
(一)洋琴連彈　ソナタ○ベトーベン作　新井さく子　佐藤てつ子
(二)唱歌　埴生の宿　明治女學校生徒諸氏
(三)獨唱　天地○ヒンシュチ作　ミス、モルトン
(四)洋琴　ギラルダ(舞踏曲)　納所辨二郎氏
(五)唱歌　晴朗中夜○アーサー、アリバン作　フェリス女學校生徒諸氏
(六)三曲合奏　都の春　山勢松韻氏外數名
(七)狂言　吹取　シテ三宅總三郎氏　何某 山脇元治氏　乙 三宅藤造氏
薙刀　明治女學校生｛松井まん子―河野たけ子／佐藤すけ子―鈴木げん子｝
落語　圓朝

第二部

(一)洋琴　ミセス、グリーン
(二)薩摩琵琶　田原元倚氏
(三)復音唱歌　歐二曲　ミス、ランド　ミス、ハート
(四)女王ドクマ　ミス、プリンス
(五)獨唱　ミセス、チーチエ
(六)三曲合奏　みだれ　山勢松韻氏外數名

以上

切符　上等　金一圓
同　並　半圓

大賣捌　女學雜誌社

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY